



企業が求める即戦力となる人材育成 —「生き方講座」の展開—

広島工業大学専門学校
校長 瀬崎 宣利

1. 今日専門学校に期待されるもの

21世紀に入り、世界も日本も様々な難しい問題に直面している。とりわけ我が国においては、私達が過去経験したことのないデフレ経済や少子高齢化の進行に、先日の世論調査では国民の85%が将来に不安を感じているという状況にある。

しかし、こうした中であって産業界においては、国際的な競争力を維持するため安価な労働力を求めて生産拠点を海外に移していた流れが、例えば高度技術を必要とするプリンターや携帯用MDプレーヤー等の製造業において国内回帰の兆しが出つつあり、少し明るさが見え始めてきた。

ところがもう一つの将来への大きな不安要素である、若者の就職が非常に厳しく、学校を卒業しても希望を持って実社会に巣立つことができない学生が多くなっている状況は年々深刻になっている。

特に問題なのは卒業後、企業に就職する環境が大きく変わっているにも拘らず、卒業したら本当に働かなければならないのか、自分のやりたいことがはっきりとわからない、自分の個性にあった適職が見つかるまではフリーターでよいという意識を持っている学生が多くなっていることである。

こうした状況の中で、本校は社会の変化に機敏に対応し、学生に企業の求める専門的職業能力や社会適応能力をつけ、就職を保障する教育機関であるとの社会的責任を自覚し教育活動を行っており、今日の雇用状況が厳しい中であっても、本年3月の卒業生の就職内定率が90%という実績を出すことができ、社会から大きな期待が寄せられている。

2. 企業が求める即戦力とは

我が国における失業率は図-1に示すように年々上昇し平成14年度には全体では5.4%になっている。

更にこれを年齢別に分析してみると若年層の失業率の上昇は急激で、昨年度の15~19歳の失業率は12.8%に達している。こうした傾向は我が国に限ったことではなく、1970年代の後半から先進国型産業においては企業が付加価値の生める労働者、すなわち高等教育を

受けて専門性を持っている人、また経験の豊かな人を求め、こうした能力が充分についていない若者の就職が厳しい状況になっている。

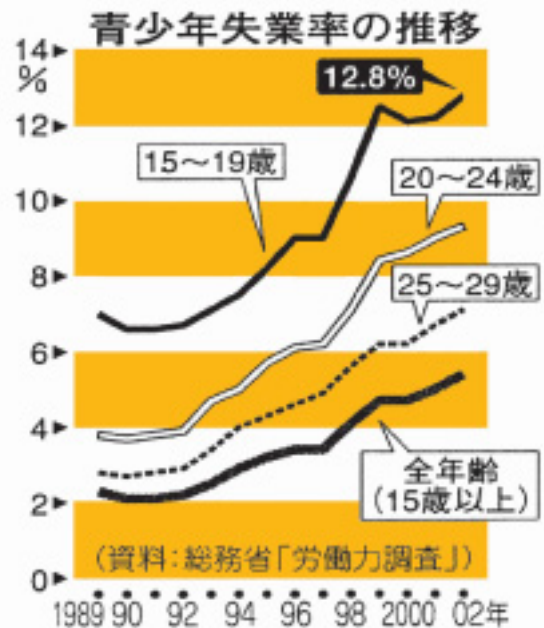


図-1

こうした中であって我が国は、新規学卒者を在学中に採用し企業内教育で育て、終身雇用という長期安定型の特別な仕組みで若者がスムーズに就職できてきた。この状況においては学生に自分の進路を決める力が無くても就職できたし、職業人としての意識も企業がつけてくれた。

ところが今日、企業を取り巻く経営環境が非常に厳しくなり、経験豊かな人でもリストラしなければならない状況に、若者を採用し時間をかけ、指導者を付けて育てていくゆとりは無く、企業は今まさに即戦力の人材を求めている。

しかし、本来企業が安定的・継続的に発展していくためには社員の年齢構成のバランスは非常に大事で、技術の伝承のためにも、また若い人の斬新なアイデア・創造力、更には活力は企業の組織や制度が疲労を生じさせないためには不可欠であり、本当に即戦力となる若者であれば積極的に採用したいと思っている企業は多い。

それでは、企業が求める即戦力とは具体的にどのような能力か、一言で表すとすれば①「自ら考え、判断し、行動できる力」と、②「コミュニケーション能力」である。

仕事において自ら考え判断しての行動は、関連する専門的な知識や技術をしっかりと身に付けてこそ実現できる。ところがこの専門的知識・技術は今日、日進月歩の著しい変革の時代であり、本校においては産業界との密接な連携により、その内容やレベルを正確に把握しその教育内容化を図ることが求められている。

本校の特色は企業において日々実務に携わっておられる方々が教壇に立ち、生の経験に基づく授業を展開できるところにある。しかし専任教員の中にはそうした企業との連携が不十分なところもあり、教員が自分の足で企業に向き現場を見て、今企業が何を求めているかを把握する、企業訪問研修や企業実務研修に取り組んでいる。このことが教員の学生の前での話に自信と説得力が生まれ、学生の学習への興味付けに結びついている。

次に企業が求める即戦力にコミュニケーション能力がある。今日企業において仕事を一人で行うことは少なく、チームで担当することが多い。そのとき挨拶を初めとするコミュニケーションによって良好な人間関係が築けることは職業人としての基礎・基本である。また今までのように大企業に入社して専門的な分野だけを担当すればよいという枠の中に入れる人は少なく、これからは専門的な職業能力にいかん汎用性を持たせるかが求められている。

例えば、測量に関する実務能力をつけ資格も取得したとしても、中小企業に入社すれば当然営業活動も担当し、知識・技術を生かして顧客へ新規事業についてプレゼンテーションをすることも必要である。

本校ではこうした企業における即戦力となる人材を育成するため、本年度より全クラスにおいて週1コマ(90分)の「生き方講座」をカリキュラムの中に位置づけ展開している。

3. 「生き方講座」の内容

(1) 1年次導入教育…今日専門学校や大学への進学率が上昇し、入学してくる学生の学習意欲の多様化、学校生活への不適応、また友人や教員との人間関係が円滑に結べない学生が多くなっている。

こうした学生を在籍させ続け卒業させるためには、入学時に高等学校から専門学校へのスムーズな移行を支援し、この学校のこの学科に入学してよかったと思わせることが大切で、この講座においてクラスの仲間

やチューターとのコミュニケーション作りのきっかけとなる内容、また学習の具体的な目標となる資格取得の説明を取り入れている。

(2) 基礎学力の定着…専門的職業能力となる知識・技術を理解するには基礎学力の定着はその効率を大きく左右する。そこで毎回始めの30分間を、国語・数学・英語の基礎学力の小テストにしている。

(3) キャリア・カウンセリングの展開…キャリアという観点から見ると専門学校こそがキャリア・デベロップスクール(職業開発・職業意識向上学校)である。

しかし、学生は職業に関する専門的な学習を積み重ねる中で、将来への展望等で色々と迷いが生じたり悩みが出てくる。それを解消するために自己理解への援助となる交流分析や人間関係力・適職診断テストの実施、また仕事についてどんな職種があり、それにはどのような能力が求められるのか職業理解を深めさせながら、チューターによるカウンセリングを行い、自分が納得できる目標を実現する就職計画を作成する指導を行っている。

(4) 社会適応能力の育成…最近企業の方からよく聞く話に、入社しても挨拶が出来ない、時間が守れない、お客さんと会話が出来ない等社会人としての基本的な生活能力が不足している卒業生が多いと指摘される。この指導については外部講師による教員の研修を行い、チューターの作成した指導案で展開している。

(5) 人間としての生き方を考える…若いときには無限と思える人生も時間には限界がある。その人生をどのように生きるのか、ともすれば自分さえよければの自己中心的な考え方に陥りそうな時代であるだけに、人のために汗を流すこと、責任を持って仕事に取り組み社会に貢献すること、そのことがいかに大きな生き甲斐になるかを考えさせることは大切なことである。

例えば、アメリカの建築家ミース・ファンデル・ローエがデトロイトに設計した集合住宅は、そこに住む人に「今は貧しくてこの住宅の良さを十分引き出せないが、これから一生懸命働いてこの住宅の素晴らしさに相応しい生活をしたい」と言わせたように、仕事を通して人に将来への希望や楽しみをもたらすことができる。これが職業であり、人生であることを学生に語りかけている。

本校の学生がこうした教育によって豊かな人生設計を描き、その自己実現を目指して展望と勇気を持って社会への第一歩を踏み出せるよう、これからも日々学校改善に努力を続けてまいりたい。